

CSW66 ユースレポーター報告書

CSW66 参加で感じ考えたこと

長崎純心大学 田中優希

この度は、ユースレポーターとして CSW66 へ参加する機会をいただいたこと、また参加に当たり多くのご指導をいただいたことに感謝申し上げます。

私は、昨年と一昨年に開催された CSW64、65 に参加しており、多くの学びを得たため今年の CSW66 にもぜひ参加したいと思っていました。私がジェンダー平等について考えるようになったのは高校生の時です。きっかけは動画配信サイトで、UN Women 親善大使であるエマ・ワトソン氏が HeForShe のキャンペーン立ち上げの際に行ったスピーチを見たことです。それまで「ジェンダー平等」という言葉を耳にしても、自分とは関係ない遠くの世界の話のように感じていましたが、この時に自分も当事者である事を強く感じました。しかし、大学生になり授業担当の先生に CSW について教えてもらい、CSW64 に参加することが決まるまでは、特に意識や行動が変わることなく過ごしていました。

それから、CSW64 への参加に向け、先生から CSW について、また、ジェンダー平等、SDGs、国連等について教えていただき勉強を始めましたが、初めて知ることが多く、自分の中できちんと消化できていませんでした。結果としては、新型コロナウイルス感染症の影響で急遽縮小された会議をオンラインで視聴して、自分の理解に満足できないまま終わってしまったように感じていました。

その後、地元の県議会議員の下で 2 ヶ月間のインターンシップ活動に参加し、女性議員の下で活動する中で、「自分は女性議員であるまえに一人の議員である。」という言葉聞き、女性が政治を行うことの意義について考えるようになりました。

翌年、日本女性監視機構(JAWW)の CSW65 ユースサポーター募集の案内をいただき、優先テーマが「ジェンダー平等とすべての女性・少女のエンパワーメントの達成のための公的領域における完全かつ効果的な参加と意思決定及び暴力根絶」だったこともあり、リベンジをしたいという気持ちで応募しました。ユースサポーターとして参加させていただき、サイドイベント報告書の作成にも関わらせていただいたことで、理解も深まり、大きな学びを得ることができたと思っています。インターンシップを通して感じていた疑問がすべてすっきりと解決したわけではありませんでしたが、様々な考えに触れることができ、自分なりの考えを持つことができるようになりました。

今回 CSW66 ユースレポーターに応募した理由はいくつかあります。まず、CSW64 と 65 で得た学びが大きかったことです。CSW への参加のみならずそれに向けた勉強会でも一つひとつで多くの学びがありました。その中で、ジェンダー平等は政治や経済だけでなく他の様々な分野につながっていることが分かりました。特に、今年の優先テーマである「気候変動、環境・災害リスクの減災政策とプログラムの文脈におけるジェンダー平等と、すべての

女性と少女のエンパワーメント」に関して、当初は気候変動や環境問題とジェンダー平等の関連性をよく理解していませんでしたが、事前に開催された CSW66 に向けての勉強会で少しずつ理解が深まったと共にもっと知りたいと思うようになり、CSW66 参加に対してより意欲的になりました。

次に、環境問題に対して意欲的に活動する同世代の存在です。グreta・トゥンベリさんのように、世界的に活躍する活動家も年齢の近い人が多いと感じています。また、私が参加している、地元の若者会議のメンバーにも FFF (Fridays for Future) のメンバーとしてとても熱心に活動している仲間がいます。彼らの存在をととてもまぶしく感じると同時に、自分の環境問題に対する知識や考えの乏しさを感じていました。そんな中、CSW66 の優先テーマを知り、絶対に参加して、自分なりの考えを持って行動を起こせるようになりたいと思うようになりました。また、CSW65 にユースサポーターとして参加した経験から、ユースレポーターとして参加することで、単に参加するよりはるかに多くを学び考えることができると思ったため、ユースレポーターに応募しました。

CSW66 では複数のサイドイベントやパラレルイベント、カンヴァンションサークル等を視聴しました。ここでは、国連 NGO 国内女性委員会、国際婦人年連絡会、日本女性監視機構 (JAWW)、国連日本政府代表部共催のサイドイベント「エシカルな意識と行動が世界を変える ～環境問題へのあらゆる人の参画に向けて～」と、Sustainable Human Empowerment (SHE) Associates Inc 主催のパラレルイベント「Syria: Child and Early Forced Marriage, Conflict and Internal Displacement Truths from the Front Lines Report Launch (シリア:子ども・若者の強制結婚 紛争と国内避難民 最前線からの真実 報告書発表会)」の2つについて、学び考え感じたことをご報告したいと思います。

3月15日に開催されたサイドイベント「エシカルな意識と行動が世界を変える ～環境問題へのあらゆる人の参画に向けて～」では、モデレーターの紙谷さんと4人のパネリストの皆さんのお話が非常に興味深いだけでなく、とても分かりやすく、参加して楽しかったというのが最初の正直な感想です。パネリストの皆さんそれぞれのお話にととてもわくわくして、環境問題や消費行動について難しく考えすぎていたということに気付かされました。「なぜ？」という視点や、自分が購入した商品は誰がどこでどのように作ったものなのかを考えることの大切さに改めて気づき、こういった小さな行動から少しずつ世界が変わっていくことに納得させられました。また、トップダウンとボトムアップについてのお話や、上勝町のゼロ・ウェイスト運動の成功の秘訣には感銘を受けました。特にゼロ・ウェイストセンターにはとても興味を持ちました。センターの設備や仕組みの素晴らしさだけでなく、お話や写真の様子からとてもわくわくするような場所だと感じました。ルールを教えて守ってもらうというよりも、大人も子どもも自ら学び、考えて行動できる環境を提供しているように見えて、私もいつか行ってみたいと思いました。また、一村一品プロジェクトについても、関わっている皆さんがやりがいを感じながら楽しそうにされている様子を感じ取ることができて、とても素敵なプロジェクトだと感じました。そして、最後に紙谷さんが言及さ

れていたように、女性のエンパワーメントとより良い環境や気候に向けた取り組みは切り離すことができないということもイベント全体を通して理解することができました。

ゼロ・ウェイストセンターや一村一品プロジェクトのようなわくわくしながら環境問題の改善に取り組めるようなプロジェクトに、私も取り組んでみたいと思うようになったので、私が参加している地元の若者会議で提案をしようと考えています。そうすることで地元の同世代の仲間と今回の学びを共有でき、この経験をより価値あるものにできると考えています。

3月17日に開催されたパラレルイベント「Syria: Child and Early Forced Marriage, Conflict and Internal Displacement Truths from the Front Lines Report Launch (シリア:子ども・若者の強制結婚 紛争と国内避難民 最前線からの真実 報告書発表会)」では、シリア北部の国内避難民が直面している児童・若者の強制結婚に関する実体調査に関する報告がされました。主催団体は国際開発コンサルティング会社の Sustainable Human Empowerment (SHE) Associates Inc で、元シリア難民でカナダに定住している女性たちの声を元に 2021年12月から2022年2月に児童・若者の強制結婚 (CEFM) に関する調査を行いました。はじめに、シリア北部の状況が説明され、強制労働の受け入れ口になっていることや、自治体、シリア暫定政府、シリア救国政府、民間の複雑なネットワーク、NGO等の相反する行政が混在していることで、人びと、特に女性は大きな混に直面しているということが分かりました。その後、フィールドワークについて方法やデータ、結果などが説明されました。調査は現地でのインタビューやGoogleフォームを使用したアンケートなどを使用して行われました。対象は18歳未満の未婚の女兒、18歳未満で結婚した女兒、娘が一人でも18歳未満で結婚した母親でした。調査結果では、少女たちは13歳から17歳で結婚しており、最も多いのは14歳と15歳であわせて過半数に及んでいました。ここで調査報告の中で示されていた少女たちの言葉を紹介したいと思います。

「私は結婚が何なのかわからず、白いワンピースを着て新しい服を買うことだと思っていました。結婚するといろいろな責任を負わされ、それができないと、夫にひどく殴られました。」

「テントに住んでいるので、簡単に破れるし、トイレも共用で、いつ知らない人に開けられるかわからないし、テントの外で寝ようとする、隣のテントが近いので怖いし、ヒジャブをつけて一日中いなければならないので、安全だと思ったことはありません。」

「若くて妊娠した私は、あらゆる意味で大きな苦しみを味わうことになりました。」

これらの言葉から、早期に強制結婚をさせられた少女たちが置かれている環境を垣間見る事ができます。テントでの生活は決して安全ではないこと、夫からの暴力やレイプなどの

危険性、また、若年妊娠による精神的・身体的負担の大きさなどたくさん問題をはらんでいる事が分かりました。さらに自死について考える人も多くいるということでした。また、このような強制結婚は父親や叔父が決めてしまい、母親や本人が反対すると暴力を振るわれる事もあるそうです。今回の調査ではありませんが、11歳の少女が早く結婚ができるようにと、ホルモン注射をして妊娠できる身体にさせられるというような事も起こっているそうです。

このイベントの中で繰り返し強調されていたことは、教育が非常に重要であるということです。「女性は結婚できないと不幸になる」というような人びとの強い考えが、強制結婚という結果になること、またそのような社会の中において状況の異常さに気付くことが非常に難しいことが言及され、女性・女の子のみならず、男性・男児に対しても十分な教育がなされるべきであると言われていました。

このパラレルイベントで私が最も感銘を受けた点は、パネリストのバックグラウンドとそれを元に精力的な活動をしているところです。イベントの後半で、1人のパネリストが自身で描いたイラストと共に、高校での友人の話伝えてくれました。彼女の友人のテラさん（仮名）は18歳になる前に結婚しました。テラさんはいつも元気がなく、周りの生徒たちが将来について考える中、暗い顔で静かにしていたそうです。この話を涙ぐみながら話していたパネリストの勇気と、強い決意にとっても感銘を受けました。

パネリスト自身も児童婚が多くある地域で生活し、友人や親戚など近い人たちが児童婚を経験していて、自分の経験や見てきたことから目をそらさず、調査や支援を行い世界に向けて発信していることは、決して簡単なことではなく、ものすごく勇気のいることだと感じました。私自身も幼少期に経験したことが、現在の学びや将来の職業選択につながっているのととても勇気をもらいました。

今回のCSW66 ユースレポーターとしての活動は非常に刺激を受けるものばかりでした。3月18日には月1回、渋谷男女平等・ダイバーシティセンター〈アイリス〉で活動する団体を紹介する市民メディアによるオンライン番組「つきいちアイリス」にJAWWの皆さんと参加させていただきました。この番組ではユースレポーターの私たちが社会に対して抱えるモヤモヤについてお話しする機会をいただいたため、それに向けてユースレポーター同士でGeneration Equalityについての意見交換を行いました。若い世代として優遇されたり「若いのに頑張っていて偉い」などと言われたりすることがあるが、これまで献身的に活動をされてきた方々あつての私たちである事、またJAWWの皆さんがいつも一緒に学ぼうととしてくださる姿勢がとても嬉しいことなどを共有することができました。本番では堀潤委員長を始め、参加者の皆さんが私たちの声に耳を傾けてくださったことは本当に嬉しかったですし、まさにJAWWの活動がGeneration Equalityを体現しているように感じました。

また、ユースレポーターとして先述したサイドイベントのQ&A・ディスカッション部分を翻訳させていただきました。ユースレポーターのメンターをしてくださった鴨澤先生と

JAWW の会員でおられる鈴木先生のご指導の下、ユースレポーターの 3 人で分担して翻訳作業にあたりました。オンラインで会議を重ね、たくさんコミュニケーションをとりながらの作業は翻訳作業の方法や担当部分の内容にとどまらず大きな学びを得ることができたと感じています。3 人の年齢が近いこともあり仲間たちの作業に刺激を受けつつ、楽しく翻訳できたと思っています。

今回の CSW66 参加はこれまで以上にわくわくしたり、心から納得したりすることが多かったように思います。これまでは、CSW での学びを持ち帰り、周りの同世代に共有したいと試行錯誤していましたが、なかなか思うようにはできていませんでした。今回参加したサイドイベントでは非常に興味深いだけでなく、「自分も何か行動を起こしたい！」と強く感じたので、この気持ちを若者会議で伝え、みんなで意見を出しあって考えることができたなら良いなと思っています。私が参加している若者会議では「ポジティブアプローチ」を大切にしている、「これがあったら面白い」「こうなったら楽しい」という気持ちが活動の原点になっています。なので、今回感じたわくわくをそのまま伝えたいと思っています。あわせてこれまで CSW64,65 での学びを共有し、みんなでジェンダー平等を考える機会にできたらと思っています。

最後に、ユースレポーターとして CSW66 に参加できたことはとても貴重で大きな経験となりました。この経験をそのまま終わらせることなく、新たな活動に活かせるよう精進してまいります。ありがとうございました。